

## 「チュラロンコーン大学派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科2年 (氏名) 間宮春希

## ① 学習成果

プログラムに参加して、大学での学習と国際理解の意欲に関する2つの変化が起きた。

まず、交流を通じた広い視点を持ち、大学で学習したいと感じた。プログラムには、学年や学部が異なる様々な生徒が参加した。プログラムを通して、同じテーマの発表でもバックグラウンドが異なると発表内容が異なると感じた。例えば、経済を学ぶ方は、価値創出や地域振興という視点で伝統工芸の発表を行った。私は古くから続く文化の歴史に注目して発表をしたので、工芸の振興と継承という視点に驚いた。発表や交流の場が新たな視点の発見につながるので、受動的な講義だけでなく意見交流の場がある学習を行いたいと感じた。

次に、他国や世界の現状を学びたいと感じるようになった。プログラムを通して他国の理解と日本との比較は、日本の理解につながると感じた。例えば、政治の情報収集のためタイではクラブハウスを利用すると聞き、日本とタイにおける、政治に対する意識の差を感じた。タイ以外の国と比較した日本の姿を知り、改善すべき日本の課題や優れた点を見つけ、日本に住むとはどういうことか見つめなおしたいと感じた。

## ② プログラム内容と経験

事前学習、タイ語の学習、文化交流の3つのプログラムがオンラインで行われた。

事前学習では京都大学に留学中の生徒に、英語でタイ語を学んだ。発音して交流できるようになったものの文字を読むことができず、タイ語を学ぶ難しさを痛感した。そして、失敗してもマイペンライ(大丈夫)の精神で支えてくれる先生の姿勢に、穏やかで優しいタイの国民性を感じた。

タイ語の学習では、家族の紹介や地図の教え方といった実践的な内容を中心に学んだ。事前学習を活かした交流の中でも不明点が生まれたが、マイペンライと明るく支えられ伝えようとする態度が大切と気づいた。文化交流では各先生の講義と、タイの学生との交流会を行った。祭り、信仰、伝統工芸、歴史といった各先生の講義では、日本との比較や意見交流が活発に行われた。タイの学生との交流会では、日本の年中行事である月見と日本で流行のアプリを私は紹介した。しっかり伝わるように、英語と日本語とローマ字読みを交えたスライドで紹介した。伝わっているか不安だったが、発表後に拍手や質問をする生徒がおり、言語の壁を超えて伝えられる喜びを感じた。また、Tik Tok やマッチングアプリが流行っている点に日本との類似性を感じる一方で、授業で Google スライドを利用すると聞き授業形態の差を感じた。

## ③ 進路への影響について

プログラムを経て、国際的な交流を受け入れ働きたいと感じた。交流会では日本語を学ぶ大学の人が zoom の画面いっぱいに表示され驚いた。そして、国際的な交流はオンラインの普及に伴い今後ますます増えるだろうと感じた。国際的な交流には言語の壁があり難しいが、相手や自分がつ、伝えたいという気持ちを大切に働きたいと感じた。なぜなら、私がタイ語の学習で苦戦していた時に、タイの方はマイペンライと明るく声をかけ支えてくれたからだ。コミュニケーションの根底にある伝えたいという気持ちを大切に、グローバル化する社会で働きたいと私は感じた。